

長野県飯山市

# 宮 中 遺 跡

分布確認調査報告書

1979年2月

飯山市教育委員会

長野県飯山市

# 宮 中 遺 跡

分布確認調査報告書

1979年2月

飯山市教育委員会

## 序にかえて

飯山市教育長 小林忠一

飯山市瑞穂小学校と犬飼小学校の統合については、昭和47年度に飯山市教育委員会が作成した案であった。昭和51年度にこれを見直していくべく教育委員会が考究していのたであるが、両地区住民の統合小学校建設への気運が急速に高まり、53年8月臨時市議会にて、この建設が決定した。決定に従って、地元住民の合意による統合小学校位置の宮中地籍の用地買収を8月中に行なったのである。こうして、今年の除雪前に整地を行なって、来年度は校舎建築を行なう計画となった。

宮中地籍は、昭和52年に発刊した飯山市遺跡分布調査報告書でも明らかのように古くから縄文中期の遺跡として知られていたのである。統小（仮称東部統合小学校）用地は、遺跡のすぐ北側にあって、その位置からして遺跡であるかどうか甚だ微妙であった。

そこで、飯山市北高等学校教諭高橋桂先生に調査の担当を依頼し、飯山市教育委員会は10月6日から10月12日の期間をかけてこの確認調査を行なったのである。調査には、高橋桂先生の指導のもとに東部統合小学校建設委員会の協力による発掘作業員の方々と調査研究員である市教育委員会嘱託望月静雄氏があたった。

調査面積は約100m<sup>2</sup>であって、約5000年前の縄文前期、中期土器片や石器が出土したのである。この調査報告書は、千曲川を西に見下ろす台地の宮中遺跡を解明する上に、貴重な文献となると共に、雪深き北信濃地方の考古学に寄与すること多大なものがあろう。飯山市教育委員会は、この調査報告を大切にし、益々埋蔵文化財の保護に努力していきたい。この旁に当られた高橋桂先生、協力を惜しまれなかった東部統合小学校建設委員会に深甚なる感謝の意を表して止まない。

## 例　　言

- 1 本書は飯山市立東部統合小学校（仮称）建設用地に係る宮中遺跡の確認調査報告書である。
- 2 宮中遺跡は長野県飯山市大字瑞穂字宮中435番地等に存在する。
- 3 調査は飯山市教育委員会が主体となり、昭和53年10月6日～10月12日にかけて行なった。
- 4 本調査の参加者は以下のとおりである。

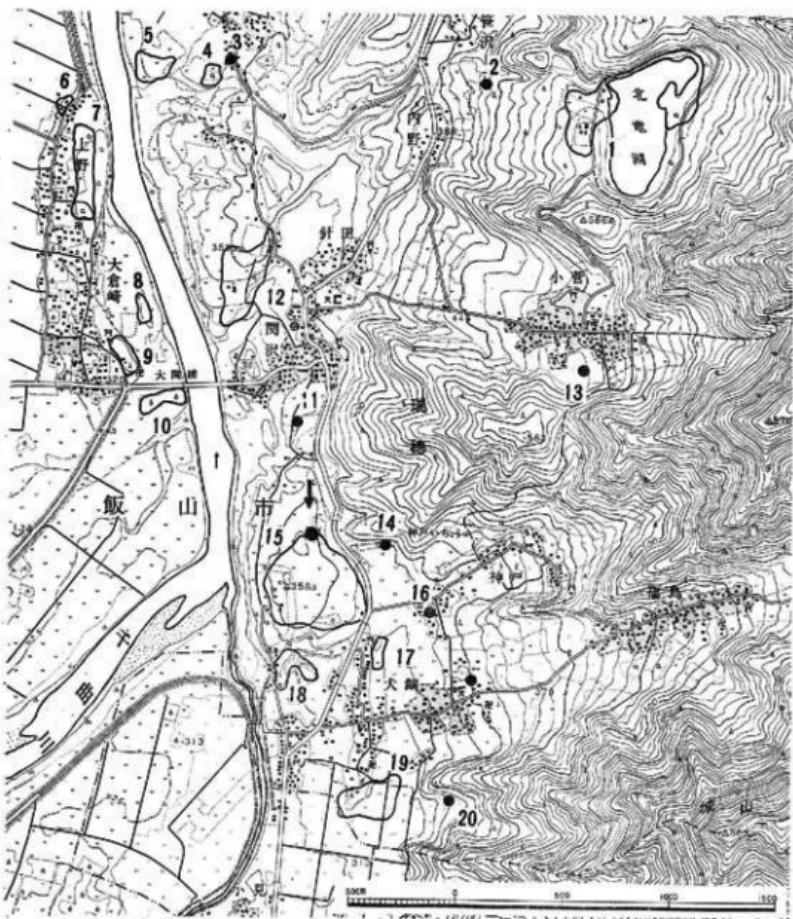
〔調査担当〕高橋桂（飯山北高等学校教諭）〔調査員〕望月静雄（飯山市教育委員会嘱託）〔協力者〕  
（瑞穂地区）佐藤一元、桑原近義、小林良美、大平はな、石川伝治、岡本虎治、石川謙次、橋本一郎、（教育委員）小林庄作、（教育委員会事務局）浦野昌夫、渋沢陽一、望月富久子、坪井正、高野ミツ子、丸山一男、上松昭、小林忠美、小林芳二、池川稔、（建設課）米持五郎〔事務局〕青木剛（飯山市教育委員会社会教育係長）
- 5 本書の作成は高橋、青木、望月が行なったが、前期土器については金井正三（須坂市教育委員会社会教育課）に執筆を願った。編集は高橋が行なった。
- 6 出土遺物及び実測図等は飯山市仮資料室に保管してある。

## 目　　次

I	遺跡の位置と周辺の地理的環境	1
I	調査経過	3
1	調査に至るまでの経過	3
2	調査概要	3
II	発掘区と出土状態	5
1	遺物の出土状態	5
2	出土遺物	8
IV	おわりに	11

# I 遺跡の位置と周辺の地理的環境

宮中遺跡は、飯山市大字瑞穂字宮中に所在する。（第1図）



- 1 北龟湖遺跡 2 内野遺跡 3 沢沢遺跡 4 南原遺跡 5 日施遺跡 6 上野(Ⅰ)遺跡  
7 上野遺跡 8 大倉崎(Ⅰ)遺跡 9 大倉崎遺跡 10 濱附遺跡 11 潤沢(仮称)遺跡 12 太子林遺跡  
13 南龟湖遺跡 14 狐塚古墳 15 宮中遺跡 16 猿飼田遺跡 17 城ノ前遺跡 18 千  
刈遺跡 19 尾崎遺跡 20 北和栗遺跡

第1図 宮中遺跡の位置及び周辺主要遺跡分布図

甲信国境に源を発する千曲川が信濃に残す最後の平が飯山盆地である。飯山盆地を過ぎると千曲川は狭谷を穿入蛇行しつつ越後へと流れ去る。飯山盆地西縁は、黒岩山、(938.6m)鍋倉山(1288.8m)等比較的低い山地が連なりかつて越後へ通ずる幾つかの峠道が存在していたのに対し、東縁は毛無山(1640.98m)等三国山脈の支脈によって、また断層構造線の横走によって急峻な山地で画されている。平地は盆地のほぼ中央を北流する千曲川によって東西に二分される。西側は長峰丘陵を介在させて外様平、常盤平が広がり当地方では中心的な穀倉地帯となっている。一方東側は、その南半にかつての千曲川氾濫原である木島平が広がるが、千曲川が東縁に近接するにしたがって、段丘、丘陵等の微高地が開拓谷を隔てて断続的に連なるという複雑な地貌を呈している。そしてこれら微高地上に幾多の遺跡が存在している(註1)。宮中遺跡もその一つである。

宮中遺跡は、木島平の北縁に位置する宮中丘陵上に存在する。宮中丘陵は南側は幅広い台地状を示し、北に向って徐々に馬の背状に細長く続く約1kmの丘陵である。西は比高差約40mで千曲川へ比較的急傾斜で接し、東側は緩やかに凹地へ移行する。また南側は急崖となって沖積地に接する。遺物分布は、丘陵上の南側、特に東南部を中心として広がっており、今回の調査区は北方の台地状から馬の背状地形へ移行する地点で東側は急斜で谷状地が入り込む。遺跡分布調査報告書(註2)では、分布範囲の北限地点である。付近一帯は畑地でホップ、野沢菜等が作られている。本丘上より南を望めば木島平を隔てて高社山が聳え、西を望めば千曲川が眼下を流れ、常盤平、長峰丘陵、さらに関田山脈が横走し素晴らしい景観を醸し出している。

宮中遺跡周辺には幾多の遺跡が存在するが、発掘調査が行なわれたのは大倉崎遺跡(註3)のみであってこの地域における古代文化の内容は判然としない。従ってここでは特徴的な事例に限って述べることにしたい。まず先土器時代遺跡の多い事が挙げられよう。上野、瀬附、日焼、内野、北竜湖、千刈等の遺跡があり、飯山盆地内の該期の遺跡の大半はこの地域に集中している。そしてまた立地は、千曲川の河岸段丘の微高地上に多く存在しており、該期の文化的内容を考える上に重要な指針をあたえている。これら先土器文化の遺跡群の中でも日焼、千刈遺跡は内容的にも充実しており、注目すべき遺跡といえよう。次に該地域のもう一つの特徴は、弥生時代遺跡の存在が明確でないということである。これは、初期の水耕耕作を営むに足る地理的条件が充分でなかったためと考えてよいであろう。ただ弥生式中期の特徴的な石器である太形蛤刃石斧が採集されているので、全く弥生式文化の浸透が認められなかった訳ではない。古墳時代に至ると孤塚古墳が存在しており、古墳文化の浸透が行なわれたことを明確に裏付けている。そしてこの古墳は飯山盆地の東半における古墳文化の北限となっている。ただ北竜湖周辺は、湖という特殊的条件が備わっておったために人間活動が容易に行なわれやすかったのであろうか、細々とではあるが先土器時代から平安時代までの遺跡が連続的に認められている。

#### 註

註 1、2 長野市教育委員会「遺跡分布調査報告」昭和52年

註 3 高橋桂他「北信濃大倉崎遺跡調査報告」信濃第28巻4号 昭和51年

(朝月静雄)

## I 調査経過

### 1 調査にいたるまでの経過

飯山市教育委員会は、学校教育の長期基本計画に基づいて、学童の減少、校舎の老朽化が進行して危険度の高い瑞穂小学校、犬飼小学校を統合して東部小学校（仮称）を昭和54年度中に建設することとした。

建設予定地については、教育委員会と地元民との話し合いの結果、瑞穂小学校、犬飼小学校との中間地点である宮中丘陵北半が位置、環境とも申し分ないと結論に達した。そこで教育委員会庶務係及び地元関係者の間で用地買収、代替地等の仕事が意欲的に進められ、2万3000m<sup>2</sup>が統合小学校予定地として確保された。けれども当該地盤は、縄文中期の集落と目される宮中遺跡の範囲に一部かかっている恐れが十分考えられた。そこで急拠市文化財専門委員会は、あらゆる角度から検討した結果、地元民の埋蔵文化財に対する理解の喚起とともに統合小学校の早期建設を望む熱意の両方を生かすためには分布確認調査を早急にしかも十分に行うべきであると結論した。これを受けて教育委員会は、文化財保護費を補正予算に計上し、九月議会で議決を得た。そこで昭和53年10月6日から12日までの7日間を調査日とし、調査面積を100m<sup>2</sup>として実施した。調査期間は国民体育大会開催の直前であったが、統合小学校建設を予定通り進めるためには降雪前にブルドーザーによる地廻し工事が完了している必要があったため止むを得ず実施したのである。豪雪地帯という地理的特殊性故の宿命というべきであろうか。

今回の分布確認調査は、期間も短く、調査面積も少ないため調査委員会を結成せず、市文化財専門委員高橋桂氏（飯山北高教諭）に調査担当を委嘱して実施した。

（飯山市教育委員会社会教育係長 青木 剛）

### 2 調査概要

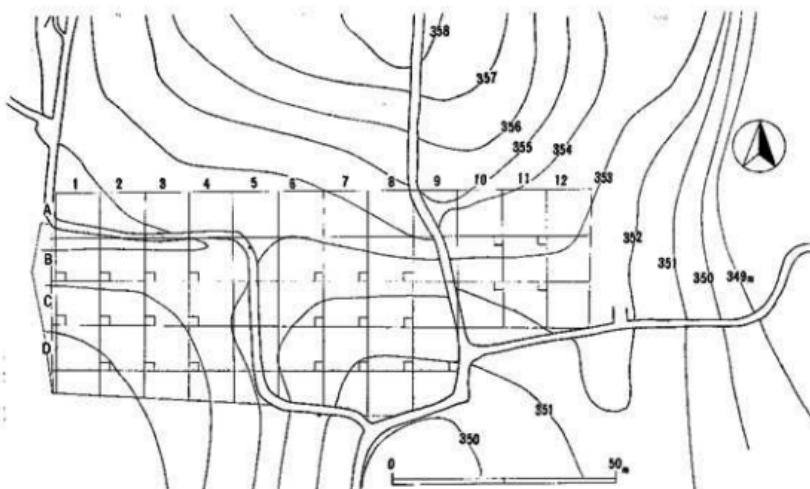
#### <グリット設定>

統合小学校建設予定地南境界杭の一つを基本ポイントとした。方位を北に合わせてその延長線をY軸とし、直角に振ってX軸とした。次に10m<sup>2</sup>の方眼をかけて大グリットを設定し、その中の一隅に2m<sup>2</sup>の小グリットを設けた。（小グリットの位置を統一出来なかつたのは地形的な制約があつたためである）。No.は西北隅の杭を基点として西へ1、2、3…、南へA、B、C…とした。その結果45の大グリットを設定し得た。そして、その内で25の小グリットを最低限調査することとした。

#### <調査日誌>

10月6日 天候晴れ

小林教育委員長、浦野教育次長、高橋調査団長が挨拶。調査についての説明を望月が行なった後、



第2図 グリッド設定図

発掘作業を開始した。調査区の最も東側B-11杭、B-10杭より着手する。縄文土器片数片とブレイドが出土。C-11杭、C-10杭、D-9杭、D-8杭に順次着手したが、遺構等は検出されず、土器片を僅か検出したのみである。

10月7日 天候晴れ

B-2、3、4杭、C-1、2、3、4杭、D-2、3、4杭を完掘。遺物は皆無であった。C-7、D-7杭より縄文中期土器片が出土。昨日途中で終了したD-8杭は、まとまりをもって出土してきたので、北、西へそれぞれ拡張する。

10月8日 天候 晴れ

C-7杭、D-7杭終了。C-6、D-6、C-8杭に着手。D-6杭より表土下約20cmより石器出土。C-6杭は表土下約1mより縄文土器片が出土。どうやら、調査区内には遺構の存在は認められないようである。

10月9日 天候 晴れ

D-8杭西をさらに拡張。表土下約1mに縄文前期土器片がかなりまとまっている。セクション図作成。

10月10日 天候雨のち曇り

雨のため中止する

10月11日 天候晴れ

D-8拡張区を清掃、写真撮影。平板測量にて遺物の実測。D-12杭も若干まとまって出土しているために東へ拡張したが、数片検出したのみであった。

10月12日 天候晴れ

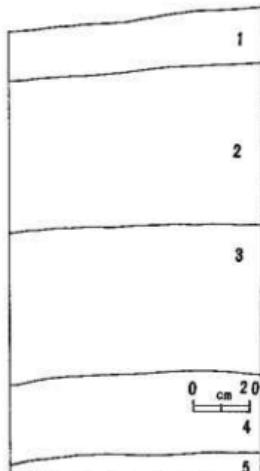
各調査区清掃後、写真撮影を行なう。器材等の片付けをし、午後3時には企作業が終了した。

- 351 -

#### <層位>

調査区を詳細に観察した結果、台地状区域と谷地状区域とでは、層位も著しく相異していた。第3図は、C-6杭内セクション図であり谷地状区域に属する。I層は耕作土。II層、暗褐色土層—I層に多く粘着性に富む。III層、黒色土層—II層に比べしまり悪い。IV層、暗褐色土層—I層に類似するが、ボロボロとした上層である。V層、ローム層。以上、ローム層まででは150cmもあり厚い腐植土によって覆われている。一方(B、C、D-1、2、3、4等) 台地状区域では、ローム層までわずか15~20cmをかぞえるのみであった。

(望月静雄)

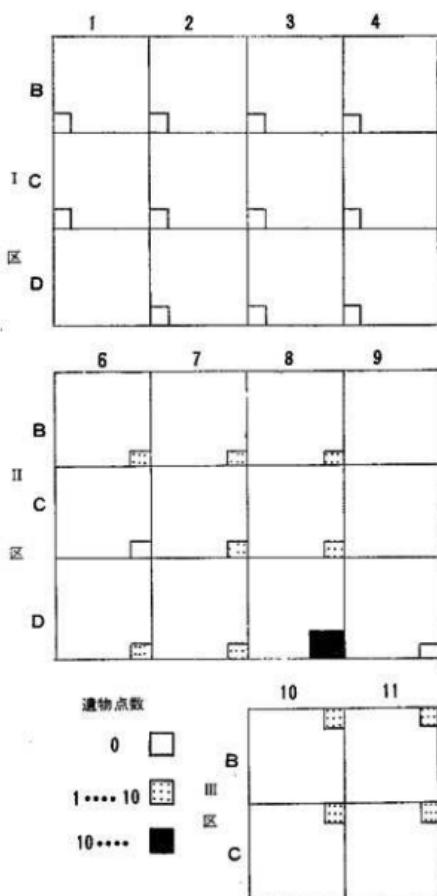


第3図 層序

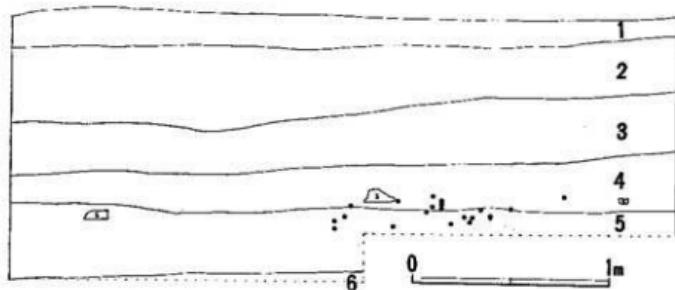
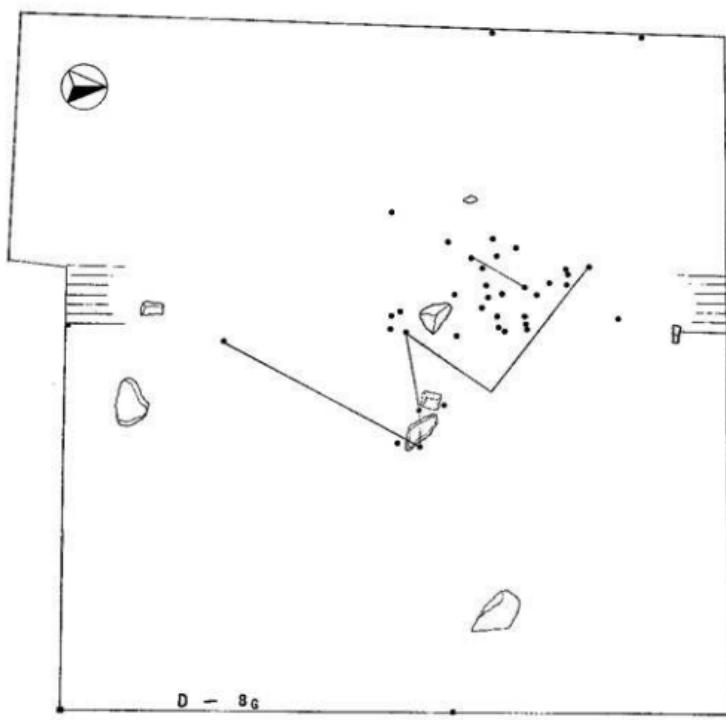
## III 発掘区と出土遺物

### 1 出土状態

調査区を便宜的にI~V区に分けて述べたい(第4図)。まずI区については、遺物は全く検出されなかった。したがって具体的な生活の場としての痕跡は、当地区においてはないと理解してもよい。II区は、多くのグリットで数点の遺物が出土した。しかし、D-8杭を除いては平面的、層位的にもまとまりを有する出土状態ではなかった。D-8杭の出土状態は第5図で示したように約40点がまとまって出土した。遺物が集中的に出土し始めたIV層下面より丹念に調査したが遺構は検出できなかった。各土器片の破損口は何れも磨滅してやや丸味を帯びていることから、流れ込みの可能性が強い。このことは地形的にみても妥当とされよう。V区はローム層まで約30cmであった。各グリットから1乃至5点の遺物が出土したが、散在的で遺構等も検出されなかった。以上が各区の出土状態である。遺構等の検出はなかったが、I区以外の調査区では若干はあるがほとんどのグリットより出土した。したがって、調査地点は遺跡の中心的存在ではないにしても、その周辺での人の活動が活発に展開され、その影響を受けた地点であると考えてよいであろう。(望月静雄)



第4図 遺物の出土状況



第5図 D-8 Grit及び拡張区遺物出土分布図

## 2 出土遺物

### 縄文前期の土器

わずかに53片出土したのみであるが、そのほとんどは同一個体の土器である。

1～3は縄文のみの土器である。いずれも器形は深鉢形で、文様は単節斜縞文のみである。胎土・焼成・整形は良好である。1は口縁部、2、3は胴部である。

本類土器のほとんどがこの一個体に属する。4は推定現存高45cm、口径27cmを計る深鉢形土器である。胴部は、底部からほとんど屈曲なくわずかに外反しながら立ち上っている。口縁部はさらに外反しており、平縁である。胎土・焼成は良好で、色調は淡茶褐色を呈す。内面の整形は胴部以下が粗い継ぎ整形であり、口縁部は密な横位整形である。いずれもヘラ状工具による。しかし胴部の底部に近い部分と、胴部から口縁部に屈折移行するいわゆる頭部の整形が荒れている。これらの部分はこの土器が造られたときには他部と同じように明瞭なる整形痕が施されていたものと思われる。

文様は、胴部以下は右下りの単節斜縞文で、胴部から口縁部に移行するいわゆる頭部に当る部分は右下りの無節斜縞文である。主文様である格子目文は胴部の縄文施文後、口縁部を約10cm残してこの部分に展開されている。施文方法はまず文様帶の上下を1条づつの平行沈線文で区画し、その平行沈線文上に右開きの爪形文を約8mm前後の間かくで押捺している。次に区画内に左上から右下りの平行沈線文を約2cm間かくで引き、さらにこんどは左下から右上りに同じように施文し、格子目文様を描いている。最後に格子目の交点に円形竹管文を押捺して仕上りである。

5は底部である。胎土・焼成良好であるが底部付近のためかややもろい。色調は淡褐色を呈す。無文である。

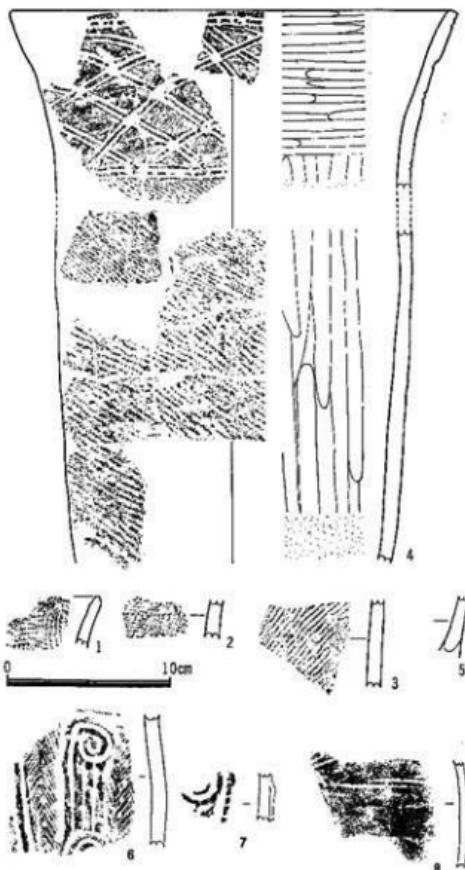
縄文前期の土器は前述したように、出土量も少ないながら、ほとんどが同一個体の破片である。この他の破片はいずれも斜縞文のみであり、さらに器壁に鐵錫が混入されていないこと等から諸磯a式あるいは同b式に比定されるものと思われる。

さて全体の器形を知ることのできる唯一の土器である格子目文土器の格子目文様は、諸磯a式に発達したいわゆる肋骨文がその後半に変化したものと考えられ、多くの研究者は諸磯a式に分類している。東京、長野県の諸磯a式併行（南大原式）の南大原遺跡出土土器には少なからず出している（註1）。ところが筆者らが調査した飯山市大倉崎遺跡では諸磯b式後半の土器に比較的多量に伴出した（註2）。いずれも千曲川下流のその沿岸に立地する遺跡であるが、さらに下流の新潟県中魚沼郡中里村泉竜寺遺跡では諸磯a～b式土器に混在していた。（註3）このことは少なくとも千曲川下流域のこの地方では諸磯a式後半から同b式後半まで統一した文様技法であることがわかる。さらにこれらの土器の器形をみると、いずれも必ずしも本遺跡出土例のように平縁で口縁部のみが外反する単純な深鉢である。この2型式にわたって採用された文様と器形の強い結び付きは何を意味するのであろうか。ちなみに本種土器が比較的多出しているのは前述した千曲川下流域であり、他地域では富山

県に類品が見られ（註4）、関東地方で客観的に見られる程度である。このことはこの種の土器が千曲川下流域の土着の土器であり、この地域が何らかの要因で1つのまとまりをもっていたことが考えられる。

この要因とはなにか。まず気候の面からみるとこの地域は日本一の豪雪地帯であることがあげられよう。さらに想像をたくましくすれば格子目文は網目を文様化したもののように思われ、故神田五六氏の鮭鱒漁が思い出される（註5）。すなわちこの地方は下流にダムができる前は鮭が大量にとれた地域なのである。

次にこの土器の用途について考えてみよう。土器の説明の項でも述べたように、この土器の胴下半部と頸部の内側がかなり荒れている。現在他の部分は明瞭に整形痕が残っていることを考えれば、製作時にはこれらの部分にも整形痕があったものと思われ、使用中に何らかの刺激が加わったものと考えられる。この刺激とは、胴下半部においては液体の煮沸、頸部については蓋あるいはさなが置かれたものと考えたい。煮沸を考えると、この土器には全体の半ほどしか液体を入れなかつたのであろうか。それとも満タンに液体を入れても火が当る部分しか荒れないであろうか。実験する機会がなかったので先学諸氏の御教示をいただければ幸甚である。



第6図 出土遺物

註 1 神田五六「長野県下水内郡井村南大原縄文諸遺跡発掘報告」信濃第3巻8号 昭和27年

2 高橋徳他「北信濃大倉崎遺跡調査報告」信濃第28巻4号 昭和51年

3 中村孝三郎他「新潟県中魚沼郡中里村泉電寺遺跡調査報告」上代文化第33輯 昭和38年

4 橋本正『富山県埋蔵文化財調査報告書』富山県教育委員会、昭和47年

(金井正三)

## 中期後半の土器

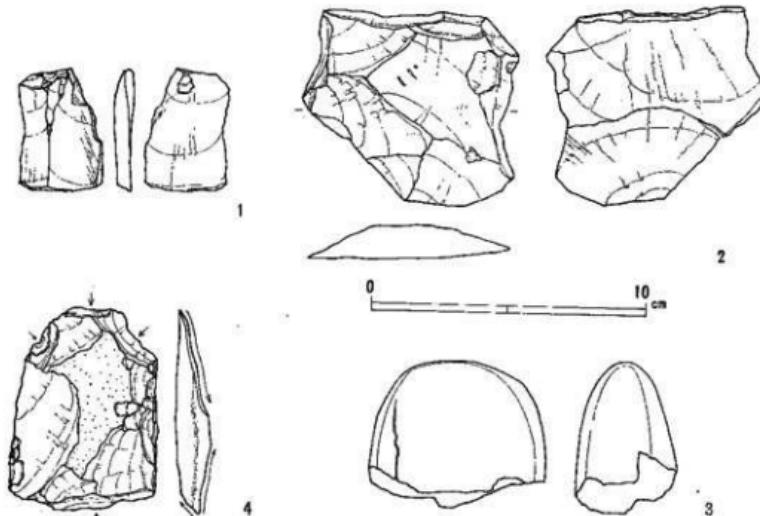
僅か3点のみであるが、縄文中期後半に位置づけられる土器である。6は口筒形の胴部で棒状工具による平行沈線と渦巻状の懸垂文が施され、その間を絞衫状の沈刻文が埋めている。絞衫状沈刻文の中央には縦に刺突文が附される。7は渦巻状隆起線上に棒状工具により刻目が施される。6、7とも色調は黄褐色で、焼成は概ね良好である。新潟県釜坂遺跡第4類等(註1)に類似する。8は2~3条の沈線が施されるが平行沈線文とはならず部分的に横・斜走する。色調は暗褐色で砂粒、小石を含み焼成は悪い。(註1)津南町教育委員会「上野遺跡」昭和37年

## 石器

石器は4点検出されたが、何れもI層乃至II層上面よりの出土であり、耕作等の二次的作用を受けたと考えられる。なお、1を除いて所属時期は不明である。

1、B-11杭、II層上面の出土である。現存長4.5cm、幅3cm、厚さ0.7cmを計る。第1次剥離面にバルブを残し、基部側には入念な調整が施されている。形状、剥離技術等から先土器時代所産のブレイドと考えられる。石質は安山岩である。

2 刃片。D-6杭、I層下面より出土。多方向から剥離を施しているが、形状は不定形を呈す。石材は多孔質安山岩を用いており、駿河地方の先土器時代に盛んに使用されることから、あるいは該期



第7図 石器

の所産と考えてよいのかもしれない。

3 磨石。B-11枚、Ⅱ層上面出土。欠損しているが、全面に軽い磨きがなされている。砂岩を用いており、風化が激しい。

4 D-8枚、Ⅰ層出土。折損品であるが、基部、先端部の表裏に再度加工を施していることが窺われる（失印）。特に裏面を薄く仕上げている点は、打製石斧からスクレイバー的な器種への転化が行なわれたのであるまいか。石質は安山岩である。（望月静雄）

## おわりに

木島平北端に位置する宮中丘陵は、土器、石器等の遺物が多量に出土しており、古くから遺跡として知られていたところである。特に丘陵の南半に遺物が濃厚に認められ、耕作の折あるいは雪消えの時期には土器破片や石鐵等が村人達によって数多く採集されている。それらの大部分はすでに散失しているけれども、考古学に興味をもっている人達も地元には何人かいて今でも大切に採集した遺物を保存しておられる。

これらの採集された遺物から宮中丘陵上の遺跡を観察すると先土器時代から平安時代にわたる各時期の遺物が存在し、遠く洪積層の時代から宮中丘陵上に古代の人達の足跡が、記されていたことを私達は知ることができる。中でも丘陵南端の千刈遺跡からは先土器時代の石器が多量に出土しております（註1）、岳北地域における先土器文化の研究にかかせぬ資料となっている。また、丘陵南半部の西側斜面にある苗圃内からも先土器時代の石器が採集されている。しかしながら宮中丘陵上の遺跡を代表するのは縄文中期であろう。そして、それも後半の時代に位置づけられるものが主体となっているようである。これら縄文中期後半における遺物の分布は、丘陵南半部の東側斜面に濃厚である。県道木島一野沢線に沿った丘陵西南端をかつて削平して家屋を建設した折や、県道派の傾斜した畑を削平して平坦化した際に多量の縄文中期後半の土器、石器が出土している。

その他に弥生式中期の特徴的な石器とされる太形蛤刃石斧や土師器、須恵器等の破片も採集されている。これらのことについては、望月が環境の項で若干触れているところでもあり、これ以上のことについて触れることは省きたい。

このように宮中丘陵上には、今後岳北地域の考古学上の研究にかかせぬ重要な遺跡が、存在している。ところで、この宮中丘陵上に飯山市教育委員会の学校教育基本計画に基づく東部小学校（仮称）が地元との話し合いの中で建設されることとなった。このことの経緯については、「発掘にいたるまでの経過」の項で触れているとおりである。

東部小学校（仮称）の件が具体化すると同時に飯山市教育委員会は、宮中丘陵が考古学的に重要な場所であることを認識し、早速に県文化課と連絡をとり、どのような処置をするべきか指導を仰ぐと同時に市文化財専門委員会に諮問した。県文化課では早速に関係一指導主事を派遣された。関係主事は、宮中遺跡を視察し、教育委員会とどう処置すべきかを念入りに打合せた。その結果、丘陵南半部は遺物の分布が濃厚であるが、北半部については従来までの調査で分布が確認されていないと

ところから、むしろ遺跡がどの範囲まで広がりをもっているのか知ることが重要であるとの指導を得たのである。この指導によって東部小学校のグランド南端にあたる部分を分布確認調査地域とした。市文化財専門委員会の結論も同様であった。

分布確認調査の結果については、調査の項すでに触れているところであるが、調査地域が宮中遺跡の北端にあたっていることが確認された。従って宮中遺跡の本体は、調査地域より南側に存在することが改めて確認された訳である。このことは私達が今迄調査してきたこと全く同様であって、私達の宮中遺跡の範囲規定が正しいことが証明されたものといえよう。

さて、調査の結果出土した遺物は、先土器時代所産と考えられるブレイド、縄文前期土器破片、縄文中期後半の上器破片が若干のみであった。遺構は全く発見されなかった。

縄文前期の土器は、遺物の項で触れているようにほぼ一例であって諸磯a～b式に比定できるものである。千曲川下流域では、下水内郡豊田村南大原遺跡の調査以来（註2）、諸磯期の立地問題や生業についていろいろと論議されてきた（註3）。私達もまたこの期の遺跡については若干ではあるが調査した（註4）。その結果、諸磯b式併行の土器は二型式に分離できる可能性があることも指摘した。同時にこの諸磯b式併行期は墓制の面でも重要な意味をもつものであることもある程度推測出来得る資料を得た（註5）。いずれにしても諸磯b式期は縄文式文化の発展を考える上で重要な意味をもつものであるといえよう。金井正三は今回出土した土器を諸磯a～bに比定出来得るとしている。そしてこの種の土器が諸磯a～b式土器に伴なって出土していることをその根拠としている。

そして、この種の土器が、千曲川下流域に比較的多量に出土しており、土着の土器でなかろうかとしている。更に論を進めて、文化内容や用途の方面にまで言及しているが、わずか1点の土器をもって結論づける訳にはいかないであろう。今後の資料集積と分析に期待したい。

縄文式中期の土器については、出土が少量であるため触ることは避けたい。先土器時代の所産と思われる石器についても同様である。

さて、私達は調査を通じて調査地点より南に宮中遺跡の本体が存在していることを再確認した。それと同時に今まで知見にのぼらなかった縄文前期文化の存在も確認した。今、東部小学校（仮称）の建設が進められ、それに伴なう通学道路の開設が改めて問題にされている。地元の計画によれば、丘陵南端より、遺物分布が最も濃厚に認められる東斜面を縦断して約400mの通学路を敷設したいとしている。文化財保護の立場よりすれば、この地点への道路敷設は是非さけてほしいと思っている。ただ、地元にとって学校建設は最重要事であって、いちがいに文化財保護のみを強調できないことも事実である。理想的にいえば既設の道路の再利用が最も望ましい姿であることはいうまでもないが、地元の利害関係と通学する児童を考えれば、最短距離で危険性の少ない丘陵東斜面を縦断するのもある程度やむを得ないとしなければならない。

ただ、この場合埋蔵文化財の保護の面から道路開設部分を充分に納得できる調査が実施されるべきであろう。時間的余裕をもって、より大きな効果をもたらす発掘調査にしなければならないであろ

う。単に破壊につながる調査であっては、悔いを千載に残すことになろう。郷土の文化財は郷土の人達が守り育てる義務があるからである。

終りに、本分布確認調査に国民体育大会前の多忙の中を労をいとわず協力いただいた教育委員会事務局の皆さん、地元の皆さんに厚く御礼をのべたいと思う。(高橋 桂)

#### 註

- 註1. 千刈在住の賀上直君が丹念に採集した石器である。
- 註2. 神田五六「長野県下水内郡農井村南大原縄文諸遺跡発掘報告」信濃第3巻8号
- 註3. 神田五六「縄文諸遺跡に於ける低地性遺跡と高地性遺跡」信濃第4巻9号
- 戸沢充則「御訪湖周辺の中期初頭縄文式遺跡諸縄文化期に於ける漁撈集落と狩猟集落」信濃第5巻5号
- 註4. 高橋桂他「北信濃大倉崎遺跡調査報告」信濃第26巻4号
- 註5. 長野県上水内郡半礼村教育委員会「半礼村丸山遺跡発掘調査報告書」昭和54年1月





第1図 調査区近景



第2図 D-8区 遺物出土状況

第3図  
調査スナップ

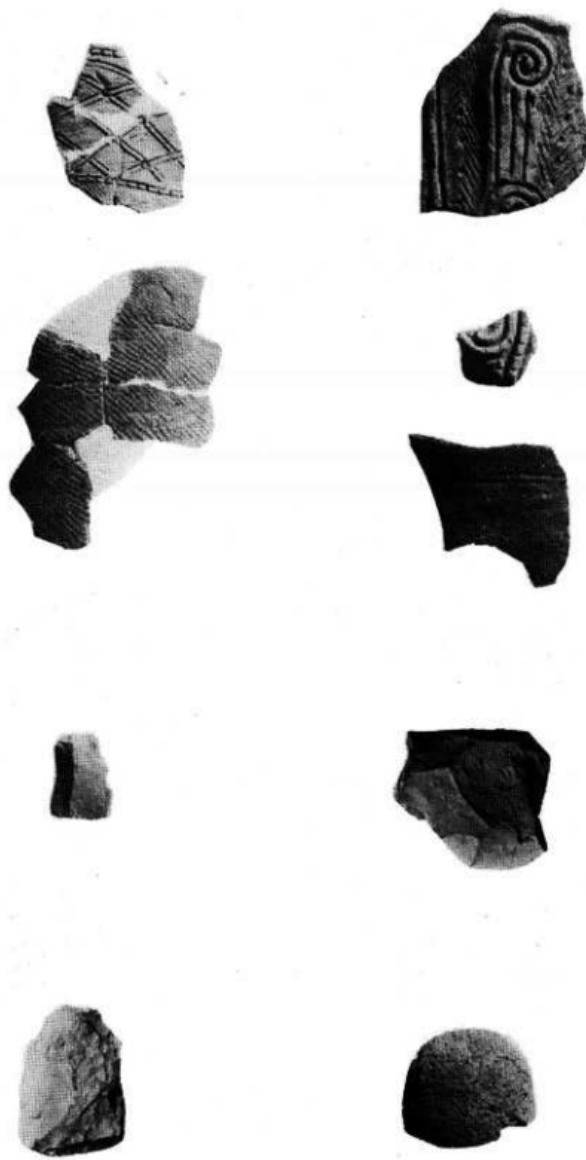


第4図  
D-8区 セクション実測風景



第5図  
B-12区の調査





第6圖 出土遺物

## 宮中遺跡

昭和54年2月10日

発行 販山市教育委員会  
印刷 三和印刷

